

## カナダ研究の潮流—政治学

# 盛んな地域研究

デビッド・スミス

カナダ講座の担当教授として日本に滞在するこの機会に、カナダ社会に関する本の紹介を引き受けることになった。これから6回にわたり、社会科学のいろいろな分野をひとつずつ取り上げていきたい。スペースの制約があるので、各回ともごく限られた数の書物について簡略に述べることになる。

まず私の専門である政治学から始めることにしよう。カナダの政治を理解するには、地域の動きに気を配らなければならない。このことは、Social Science Humanities Research Councilが発行したアルバータ州の社会信用運動に関するシリーズ十巻（創刊1950年）が示すように、以前からよく知られた事実である。

過去2、3年、研究者たちは、カナダの1部の社会学者がいうところの province-building（州建設）の原因と結果に取り組むようになり、しかも比較研究が中心になってきた。Richard SimeonとDavid Elkinsの*Small Worlds: Parties and Provinces in Canadian Political Life* (Methuen, 1980)とRoger Gibbinsの*Prairie Politics and Society: Regionalism in Decline* (Butterworths, 1980)がその好例である。前者は調査データに基づいて、連邦国家が州の住民に作り出す、ときには反発し合い、ときには補完し合う忠誠心について検討したものである。後者は平原諸州に焦点を当て、農業地域主義の古い基盤がくずれて、自己主張の強い州およびその政府がこれに代わっていると論じる。両者とも、州政治に関する旧来の見方に挑戦する興味深い仮説を提供している。

連邦制度やその運用についての本は、カナダほど著作の多いところはない。今日、ほとんどの本はカナダが存立するためには州にもっと権限分散をすべきだと論じている。これに対し、Garth Stevensonの*Unfulfilled Union: Canadian Federalism and National Unity* (Macmillan, 1979)は“時流に組みする”人々に彼らの選択を再考するよう迫る。カナダが直面する諸問題を取り扱った最近の著書としては、R.B. ByersとRobert Redford編*Canada Challenged: The Viability of Confederation* (Canadian Institute of International Relations, 1979)と、R. Kenneth CartyおよびW. Peter Ward編*Entering the Eighties: Canada in Crisis* (Oxford University Press, 1980)がある。前者にはカナダの連邦主義および政府の政策に関するすぐれた研究（例えば通信政策についての珍しい分析）および憲法論議に関する簡潔な分析が入っている。後者は一般向けにRamsey Cook, Donald Smiley, Denis Smith, H.V. Nellesといったカナダにおけるそうそうたる学者による8つの博識なエッセーから

なっている。

カナダの主要政党に関する新しい著書——George Perlinの*The Tory Syndrome* (McGill-Queens, 1980) および Joseph Wearingの*The L-Shaped Party: The Liberal Party of Canada, 1958-1980* (McGraw Hill-Ryerson, 1981)——は、小政党偏重だったこれまでの研究のアンバランスを正すことになる。Perlin教授は、著書の中で、進歩保守党はなぜ自らの行動ゆえに永久野党の地位にとどまらざるを得ないかを説明する。Wearing教授はディーフェンベーカーによって大敗退をこうむった後の自由党の再帰を分析し、自由党がなぜ中央カナダではうまくいっているのに西部カナダでは人気がないのかを解明している。

主要政党が支持基盤を地域化したため、選挙制度の運用について懸念する声が出てきている。William Irvineの*Does Canada Need a New Electoral System?*と題する論文は、PRについての主な賛成および反対意見をとり上げて、PRのメリットに関する論議に油をそそいでいる。

政治家の伝記は、長い間、連邦政府の首相に関するものに限られていた。首相の伝記研究は現在も続いており、その多くはきわめてすぐれたものであるが、ようやくにして閣僚や州の指導者に焦点を当てた伝記も現われるようになった。最近出版された伝記として、キング政権およびサン・ローラン政権における強力な経済閣僚C.D.ハウに関するRobert BothwellとWilliam Kilbornによる第1級の研究*C.D. Howe* (McClelland and Stewart, 1979)とJohn Kendleによる1州首相についての注意深い研究*John Bracken* (University of Toronto Press, 1979)があげられる。Brackenは農民を基盤として政界入りしたのち、1940年代に進歩保守党の党首になった人物である。

最後に行政についてみると、カナダの政府はその政策の大半を執行するために、いろいろな規則やそういう規則を作る事務当局に大きく依存する。しかもカナダは連邦国家であるため、こうした政策執行には連邦政府と州政府の間に協力あるいは対立関係が生じる。また1970年代における経済引き締めのため、連邦および州政府にとって規則作りは比較的にな易く、しかもあまり金もかからなかった。G. Bruce Doern編*The Regulatory Process in Canada* (Macmillan, 1978)とRichard Schultz著*Federalism and the Regulatory Process* (Butterworths, 1979)は、これらの点について触れている。規制措置に関心のある人は、Institute for Research on Public Policyの出版物が参考になる。

（筑波大学客員教授）